

I 研究の概要

1. 今年度研究主題について

研究主題

主体的に学び、進んで表現する児童の育成
～ICT 機器を活用した対話的な学びの創造～

本年度の研究主題を「主体的に学び、進んで表現する児童の育成～ICT 機器を活用した対話的な学びの創造～」とした。これは、学習指導要領に示された授業改善の視点である「主体的・対話的で深い学びの創造」を目指し、その具体的なイメージを校内で共有することを目的とした研究の2年次にあたるものである。昨年度は、研究主題を「言葉を生活化させ、主体的に学ぶ児童の育成」として、主体的な学びの創造に焦点を当て、研究を行った。そこで、今年度はさらに主体的に考えたことを「進んで表現する」児童の育成を目指した。しかし、本年度は新型コロナウイルスの影響により、対話的な学びに制限がかかった。そして、そのような状況を踏まえ、1人1台の学習者用PCと高速ネットワーク環境などを整備する「GIGAスクール構想」の取組が加速している。これらを踏まえ、副題を、ICT機器の活用を活用した対話的な学びの創造とした。

2. 研究内容と研究体制

研究内容

ア 外国語活動・外国語科・国語科・算数科における主体的な学びの充実のための授業改善

- ・児童が考えたいような生活に関連した教材の開発
- ・児童が自分自身の学習を見通し、振り返る場の充実
- ・目指す児童の姿や付けたい力を明確化した指導と評価の一体化

イ 外国語活動・外国語科・国語科・算数科における対話的な学びの充実のための授業改善

- ・児童一人一人が考えをもつための支援と「自力解決」の時間の保証
- ・各教科等の学習における、児童同士の学びをつなげる指導の工夫

ウ 外国語活動・外国語科における、有効教具・評価方法の開発、研修資料の蓄積

研究体制

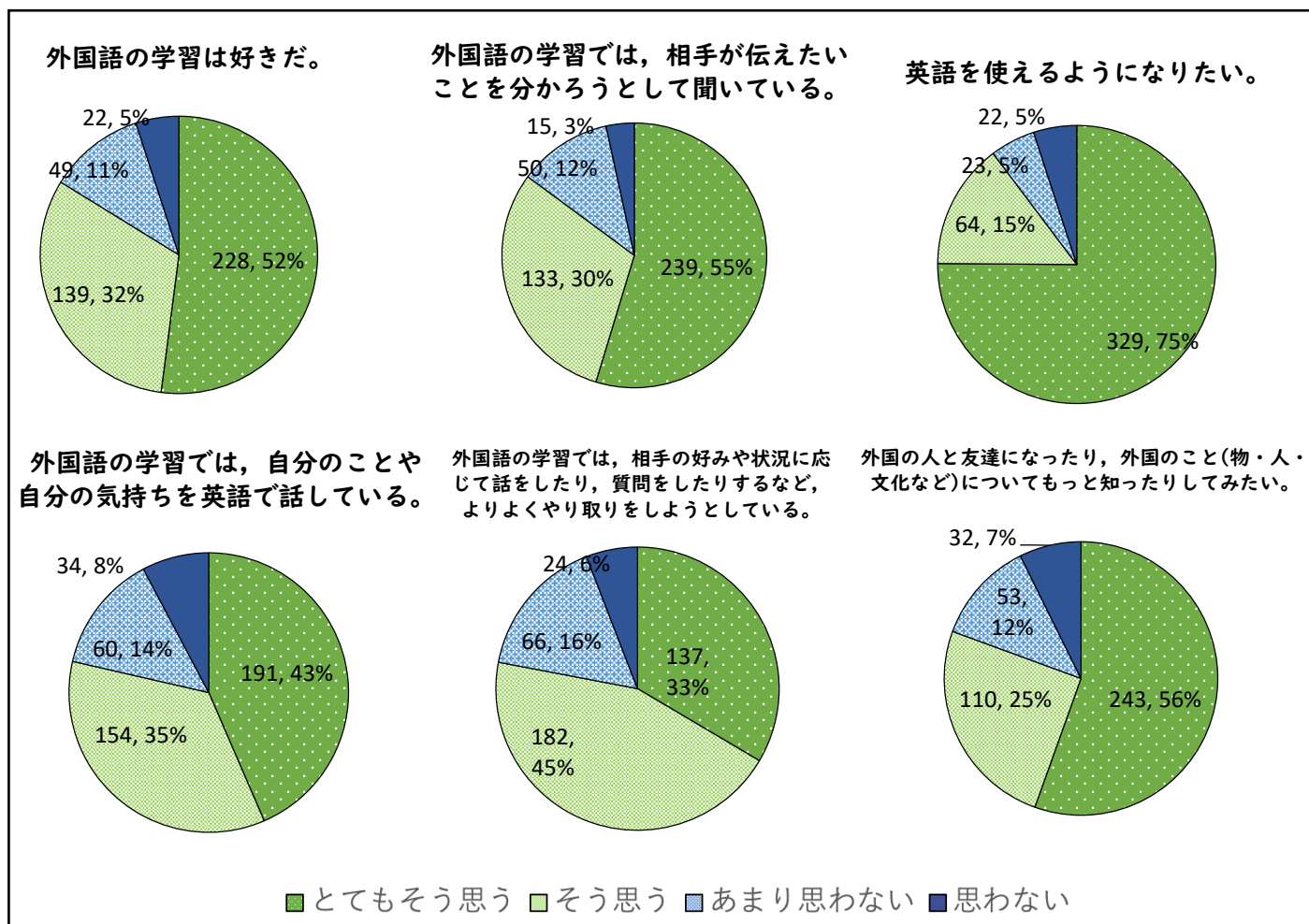
研究教科	外国語活動 外国語科	国語科	算数科
対象学年	4～6学年	1～3学年	1～6学年
研究部会	外国語・国語部会		算数部会

本校が平成26年度から研究している外国語活動・外国語科に加え、各教科の要である言葉を中心的に扱う「国語科」と理数的な表現の研究として「算数科」を研究教科とした。また、外国語活動・外国語科を1つの部会とすることで、2つの研究部会を組織した。本校の職員規模の中で人数を確保し、研究を対話によって深めるためである。

3. 課題の設定

本研究において、6月に行なったアンケートをもとに各教科等における課題および研究仮説を次のように設定した。

(1) 外国語活動・外国語科



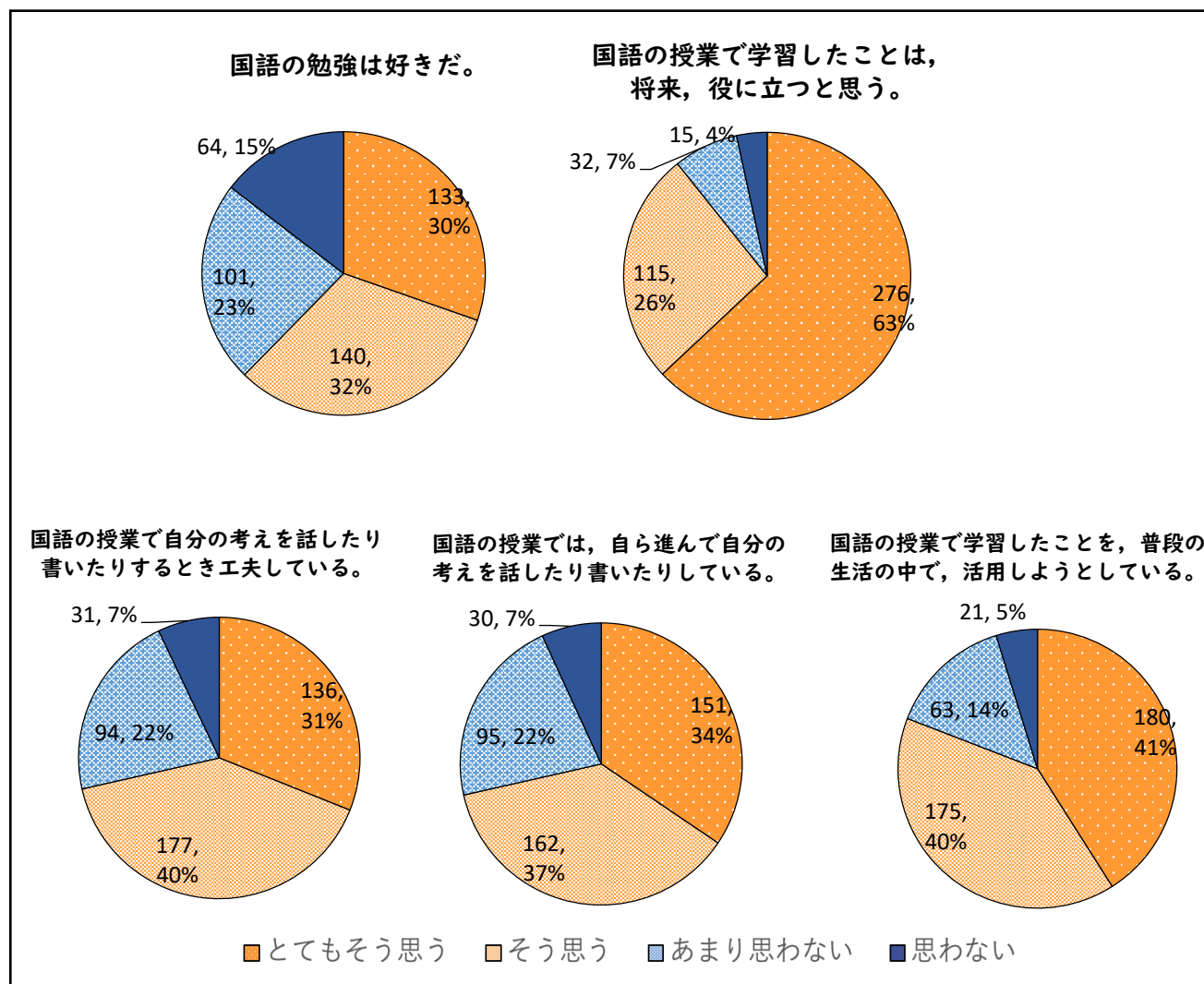
課題の設定

【図1】6月に実施した外国語活動・外国語科に関わるアンケート結果

- ・研究の継続によって、肯定的な回答が多く、一定の成果がある。
- ・一方で、苦手意識の強い児童もあり、「聞いても分からない」「覚えられない」といった記述が多くある。
- ・苦手意識の強い児童も「使えるようになりたい」という願いは、もっている。
- ・聞くことに比べ、自分の考えや気持ちを話すことや、よりよくやり取りをしようとする児童の割合が低い。

1. 目的意識をもたせ、「覚える」という感覚ではなく、「伝える」という感覚にさせる。
2. 苦手意識のある児童を置いていかない、スモールステップを用意する。
3. ICT機器を活用して実際に表現する場を作り、言葉の有用感がもてるようにする。

(2) 国語科



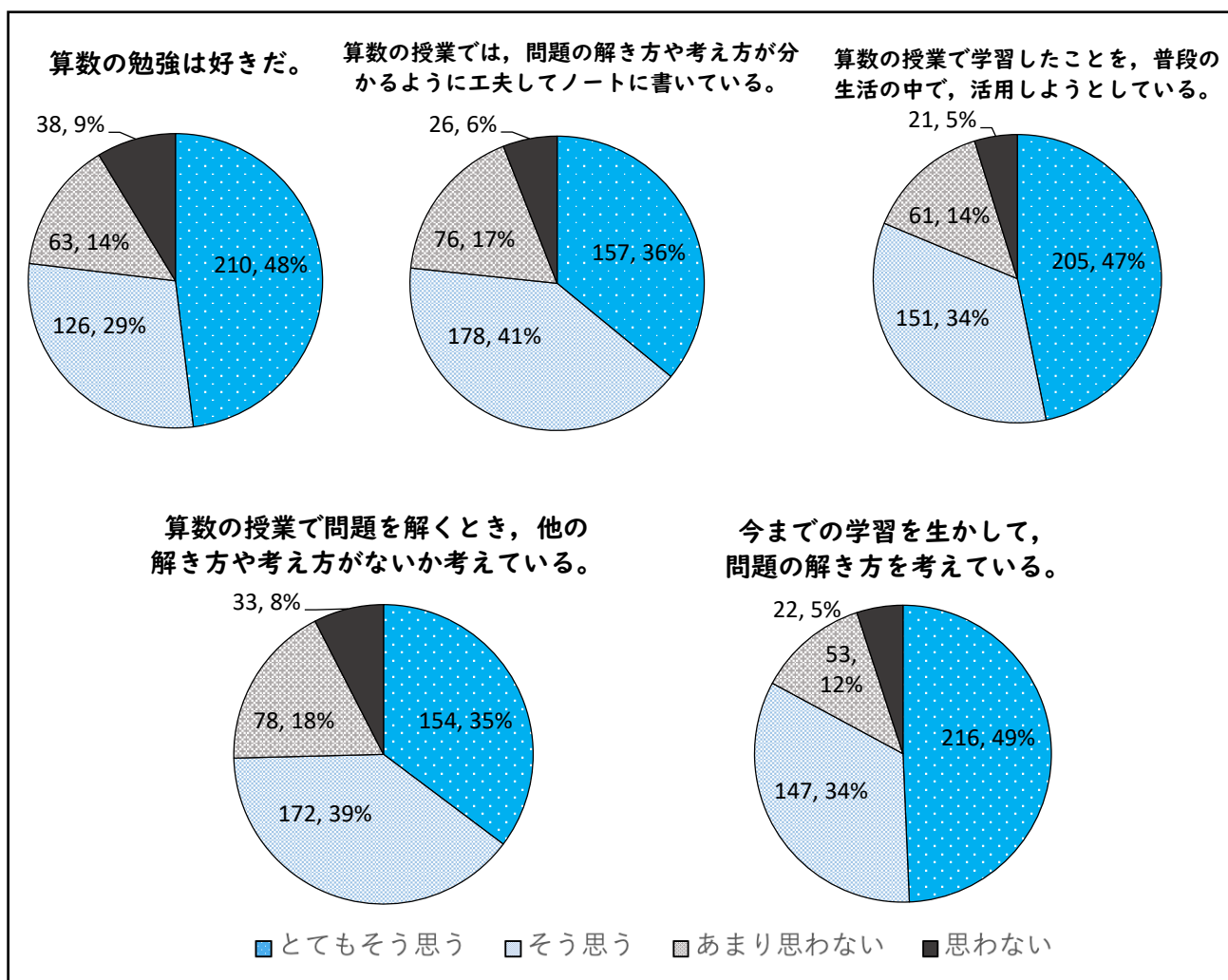
課題の設定

【図2】6月に実施した国語科に関わるアンケート結果

- ・「国語科が好きだ」という質問の肯定的な回答の割合が低い。
- ・「役に立つ」と考えている児童の割合は高い。
- ・文章の量によって意欲が下がる児童が多い。
- ・自分の考えを進んで表現していると感じている児童の割合が少ない。

1. 単元で付けたい力を明確にし、達成感のある授業作りをする。
2. 必要に応じて話型を用意するなどして、支援を行う。
3. ICT機器を活用して自分の考えをもたせたり、ゴールイメージを共有したりすることで表現力を高める。

(3) 算数科



【図3】6月に実施した算数科に関わるアンケート結果

課題の設定

- ・およそ25%の児童が、「算数を好きだ」という質問に否定的な回答をしている。また、同様の割合で、解き方や考え方をノートに工夫して書いたり、他の解き方や考え方がないか考えたりすることに否定的な回答をしている。
- ・知識や技能の面で個人差が大きく、低学年の段階から二極化している。
- ・自分の考えをもてないために、練り合いやペアトークなど、交流する活動に参加できない児童がいる。

1. ノート指導を通して、考えの整理の仕方や説明の仕方を指導する。
2. ICT機器を活用して、視覚的な支援を充実させ、自分の考えがもてるようにする。
3. ICT機器を活用して、互いの考え方や表現の仕方を交流させ、よりよいものに導く。

4. 研究仮説と検証方法

(1) 研究仮説

各教科等の「書く」「話す」「説明する」活動において、収束的または拡散的な思考が必要な教材を開発し、児童が自己の学習を見通したり振り返ったりしながら学びを積み重ね、相互に伝え合うような学習指導の工夫をしていく。その際、効果的に ICT 機器を活用すれば、児童一人一人が主体的に考え、進んで表現することができ、各教科等の資質・能力を身に付けることができるだろう。

(2) 検証方法

検証の視点	方法	検証の指標
ア ねらいとする資質・能力を育成することができたか。	児童意識調査	各教科等においてねらいとする資質・能力に係る質問項目に対する肯定的な回答の割合 90%以上
	単元末テスト・ノート等 成果物 抽出単元パフォーマンステスト	研究授業実施単元において、児童に付けた資質・能力に係る観点の正答率 80%以上の児童 90%以上
イ 児童の主体的な学びを創造することができたか。	児童意識調査	「主体性」に係る質問項目に対する肯定的な回答の平均3以上
	教師意識調査	
ウ 児童の対話的な学びを創造することができたか。	児童意識調査	「 主体性 」に係る質問項目に対する肯定的な回答の平均3以上
	教師意識調査	

(3) 検証計画

ア 各種調査実施による現状分析（6月・12月）

○児童意識調査の実施，現状把握及び目標値修正

○教職員意識調査の実施，現状把握及び目標値修正

イ 授業研究による継続分析（6月～12月）

○協議及び講師の指導に基づく授業改善情報収集，資料整理及び修正，学習環境の整備

○パフォーマンス会議に基づくパフォーマンステストの開発・実施（学期末・学年末）

○対話的な学びの創造のための学習環境の整備

ウ 各種理論研修，指導力向上演習等実施による分析（６月～１２月）

○教職員研修満足度調査に基づく研修改善情報収集，資料整理及び研修内容修正

○講師の指導に基づく研修改善情報収集，資料整理及び研修内容修正

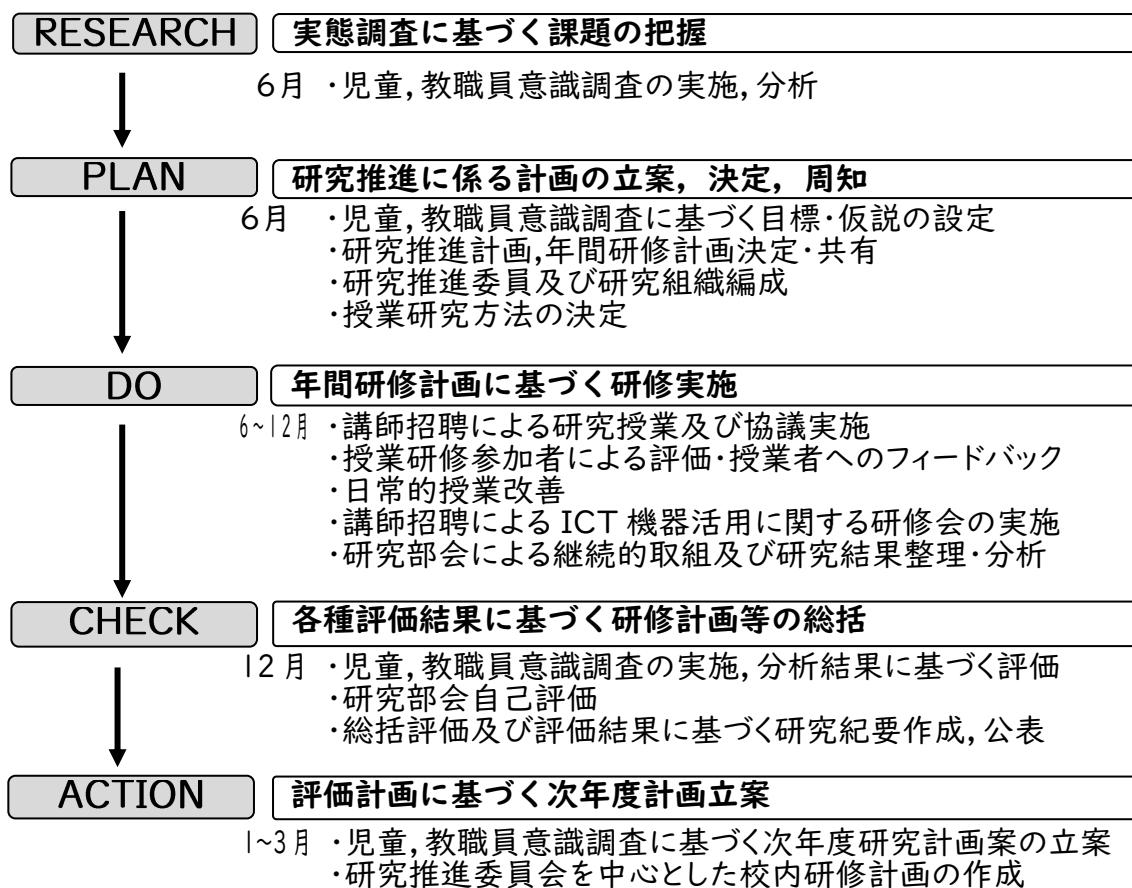
エ 研究成果物作成（年度末総括）（１月～３月）

○各部会集積データに基づく分析結果の交流及び公表

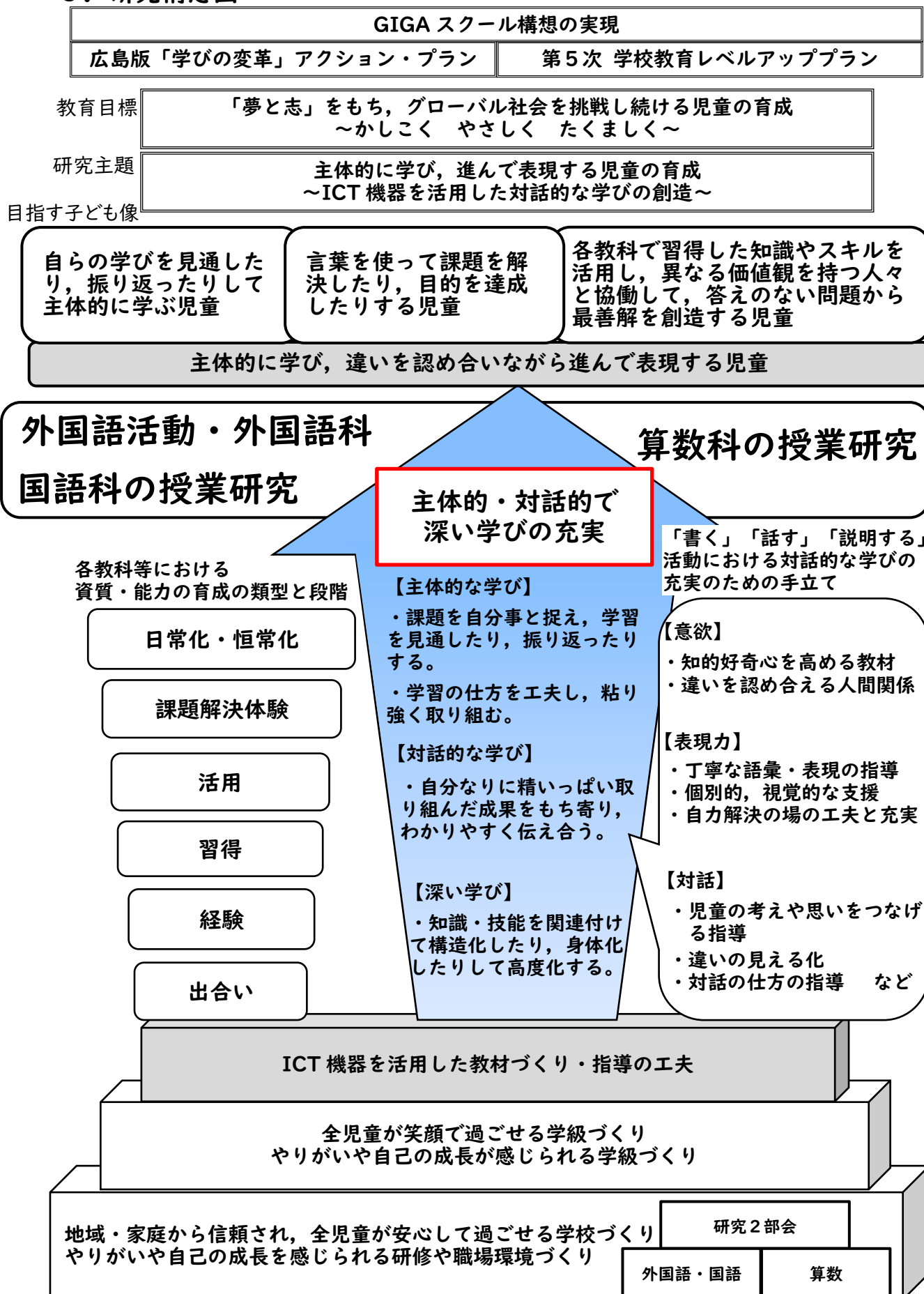
○総括分析結果に基づく課題の整理及び次年度計画の作成

5. 研修計画

（１）年間計画



5. 研究構想図



6. ICT 機器の活用方針

本校における、ICT 機器の活用については、文部科学省作成の「教育の情報化に関する手引」を参考にした。まず、指導者が ICT 機器を活用する段階として、次の3つの段階を経ると仮定し研究を進めた。

1. とにかく使ってみる段階
2. どのような場面で、どのように活用すれば効果的か考えて使う段階
3. どのような児童に、どのように活用すれば効果的か考えて使う段階

さらに、2以降の段階においては、手引の「図4-1 学校における ICT を活用した学習場面」と、1単位時間の学習の中の「導入」「展開」「まとめ」という3つの段階とを組み合わせ、図4のように整理し、目的を明確にして活用するようにした。



図4-1 学校における ICT を活用した学習場面

「教育の情報化に関する手引（追補版）」（文部科学省、令和2年6月）

		学習場面			
学習形態		導入	展開	まとめ	その他 (家庭学習など)
	個別				
	協働				
	一斉				

【図4】学習場面と学習形態の分類